
処女はお姉さまに恋してる 陰の庭師

憑依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

処女はお姉さまに恋してる 陰の庭師

【Nコード】

N0344BA

【作者名】

憑依

【あらすじ】

聖應女学院からダブルエルダーが卒業した次の年……ずっと聖應女学院を見て来たちよつと思議な庭師の話

3月 エピローグの後のプロローグ

ヨーロッパを思わせる校舎に日本特有の桜の花の花びらが舞い落ちている。桜並木に目を向けると少女達が歩いているのが見える。大学に入学する友人に別れを告げる者。泣いている在校生を宥める者。逆に泣いている卒業生もいる。笑顔で友人と歩いている者も少なくない。

俺はベンチに座ってその様子を静かに眺めている。俺が静かに眺めているとブルネットの髪にエメラルドを思わせる眼をした少女がこちらに歩いてきた。

「どうしたんだい？こんなところで1人で。」

「今年度は、特に別れを告げにくるような人は居なかったからな。」

「園芸部の人達は？」

「園芸部……いや、特に何もしてないから来ないだろ。」

俺が、少女と会話していると「キヤー！」という歓声が聞こえた。大方「彼女」達が来たのだろう。

「お前は行かないのか？ ケイリ？」

「……そうだね。じゃあね陸来年度もよろしく。」

「ああ、じゃあな。」

今日は卒業式。卒業生は別れを告げる日だ。

ここは、聖應女学院……幼稚園から短期大学まで一貫して行くことが出来る私立校であり、周りからはお嬢様学校として有名である。この学校には独特な制度がいくつかある……例えば上級生をお姉さまと呼ばなければならなかったり。最上級生の中から一人「エ

ルダー」と呼ばれる女性を選んだり……他とは少し違った学校である。

さっき来た少女……ケイリは今、2年生来年度には3年生になる。何故か彼女は時々俺の所にやってきて雑談をしたりしている。

彼女は占い等に詳しく。時には予言のようなことを言ってくる変わ……不思議な少女だ。

そんな事を考えているとさっきの歓声の原因がやってきた。2

人の少女を中心に様々な少女が歩いてくる。銀の髪の「白銀の姫

君」きさきのみや妃宮 千早。ちはや ストレートの黒髪にやや強気そうな眼「騎士の

君」ななはら七々原 薫子。かあるこ 今年度のエルダーであつた2人だ。詳しく

は知らないが今年度は生徒達の要望で2人になったとか。

2人を中心に生徒達が囲んでいて集合写真を撮っている。俺は

そんな人々を静かに眺めている。

俺の名前は白崎 はくさき 陸。りく 今は24歳だ（見た目は周りの人から1

8歳から変わらないと言われる）。ある事情があり中学を卒業し

てからずっとここで庭師の仕事をしている。基本的に俺はこの学

院の生徒とは関わらないのだが、時々相談を持ち込んだりする生徒

も居たのだが、今年度はエルダーが親しみやすかったり2年に「御

前」と言う人物のおかげで俺は今年暇だった。

そんな事を考えながら俺は少女達の中心に居る2人を眺めて考える。

さて、来年はどうなるだろうか。

3月 これは庭師の仕事なのだろうか……by陸（前書き）

これを読んで「あれ？庭師じゃなくね？」と思っても突っ込まない
てください。 自覚はしてます……。

3月 これは庭師の仕事なのだろうか…… by 陸

「つという訳でよろしくね。」

「……まあ、良いですよ。」

今俺は院長室で学院長代理一緒にいる。 学院長は昨年から入院中であり代わりに代理をしているらしい。

「……けど新生生の書類とかは教師にやらせろよ。 学院長はこんな事はさせなかったぞ。」

「別に良いじゃない。 それにあなたも嫌々言いながら手伝っているじゃない。」

「……必要な書類を渡して貰えば直ぐに手伝いをやめるさ。」

仕事に必要な書類を貰いに来たら、書類の整理をついでにと半ば無理やり手伝されていた。

「俺はまだ春休みにする仕事が残っているんだが……。」

「そんな事言つてるとあなたの使っている教室幾つか返して貰うわよ。」

「……分かったよ。」

俺はため息をつきながら書類の整理を手伝う。 俺は聖應女学院の宿直室と生徒相談室を完全に私物化している。 宿直室の方は庭師の仕事のついでに夜の見回りをするために宿直室を使っていたが、数年前警備会社に仕事を依頼した為に宿直室はほぼ使われなくなったので俺の半分自室になっている。 生徒相談室は元々エルダーや生徒会が大体解決してしまう為、生徒相談室は役目が無くなっていったので俺が勝手に使っている。

……まあ生徒相談室には時々生徒が来るので俺が勝手に相談に乗っていたりもするのだが。宿直室も生徒相談室も校舎の一階の端にあるせいで来る人が殆どいないので学院長からは私物化を許可されていたのでそれを奪われると色々キツイ。

「……寮の書類一式まとめといたぞ。」

「あら、ありがとう。それじゃあ次の仕事を渡そうかしら？」

「……書類仕事じゃないればいいよ」

「大丈夫書類仕事じゃないしあなたの元々の仕事よ。」

「やっとか……。」

俺は、がつくりと机に倒れながら呟く。 学院長代理は俺の前に紙を一枚差し出す。

「はい、壁紙はもう寮に置いて貰ったから張り替えてね。」

「はいはい、分かりました。」 俺は、ゆっくり椅子から腰を上げ院長室から出るのであった。

俺は誰もいない学院の廊下をゆっくりと歩く。 流石に春休みの為部活動以外で来る人は殆どいないが改装工事が有るのでやや工事の音がちよつと遠くから聞こえる。

「今年の寮は4人か。」

書類を見ながら呟く。 確か去年は1年生以外にも3年生に妃宮千早、2年生に曾来史わたらいふみという子も入寮してきて合計で7人が寮にいたのに比べるとかなり寂しく感じる……まあ俺は壁紙の張り替え以

外で寮に入らなかったのでよく知らないが。

いつもは生徒がいるので使わない表の玄関から出て寮を目指す。
今日は外の部活はどこもやってないらしく工事の音しか聞こえない。

俺は、この静けさにやや珍しさを感じながら歩く。

「こんなに静かなのは久々だな……。」

長期休暇の時はいつもこのぐらい静かだがいつもより寂しく感じるのは最上級生が卒業したからだろうか。

俺が、そんな事を考えた後やや苦笑いしながらも寮に辿り着く。
聖應女学院の寮はヨーロッパのお屋敷と言われても信じてしまいそうなくらいの美しさがある。もっと大きければお屋敷と信じて疑わなかっただろう。俺は寮の前の門に立ちゆつくりと扉をノックする。しばらくすると中から元気のいい返事が返ってきた……珍しいな、いつもなら誰もいないからこの後、鍵を自分で入って開けるのだが。

「はいはい……ってどちら様？」

寮から出て来たおでこが目立つ少女は寮の前に立っている俺を見ていきなり疑問をぶつけてくる。

「あれ？ 俺の事聞いてないの？」

「いや、何も。」

少女は本当に何も聞いてないようだ。

「寮に誰か要るならそれくらい教えるよ……。」

「？」

俺は何も教えなかった学院長代理を恨みつつ（まあ彼女も知らなかったのだろうけれども）目の前の少女に説明をする。

「分かり易く言々と新入生の部屋の壁紙を張り替えに来た。」

「あー！ 昨日何か荷物届いてましたね！」

「ああ、多分それだ。」

俺の言葉に反応して急に彼女の顔が納得顔になる。……こんな答えて信じて大丈夫かと思いつつも俺は寮の中に足を入れる。

「何だ〜そういう事ですか〜。」

「そういう事って？」

「いや〜、この学院内で男の人を見たのは初めてですから何事かと思いましたよ〜。」

「……まあ、分からなくてもない。」

この学院は俺以外教師も含め全員女性だ。教師は流石に俺の事を知っているが生徒は俺に会うまで存在を知らなかったという人はかなり多い。

「まあ、いつもは生徒には拳力会わない様にしているしな。」

「あれ？ 極力って事は学院で働いてるんですか？ てつきり業者の方かと……。」

「ああ〜、俺は一応学院で働いてるんだが……。」

まあこの子は俺のことを知らない様だ……多分今この学院内で俺のこと知っているのはケイリくらいなんだろうな……。

「へえ、庭師ですか。」

「まあそれ以外にも体育祭とかの準備を手伝ったりとかもするけど。」

「っという事はこの仕事も……。」

「まあ、元々の仕事とは違うけどこういう事も仕事の一つだな。」

「ほへえ。」

目の前にいる少女はやや変な声を上げて感心していた。

「なんか大変ですね。」

「いや、流石に10年も働けばもう慣れた。」

「え！？ 今幾つですか！？」

「24」

「若！？」

「そうか？」

「てつきり18歳かと……。」

こう言われるのにはもう何回目だろうか……20を超えてから何時も年齢を言うと大体こう言われる。

「……さっさと仕事を始めるか。」

「あ、あれ？何か？不機嫌？」

「いや、別に怒ってねーよ。」

「ぜ、絶対嘘です……。」

貼り替えが済んだ時には日が落ち掛けていた。最近日が落ちるのが遅くなっていたがこういう仕事をしているとまだまだ日が落ちるのは早いと思ってしまう。

「いやー、お疲れ様ですね。」

「ん？お、ありがと。」

俺が作業を終え二階から降りてきたところおでこが目立つ少女が紅茶を用意していた。

「そういえば、お前は何で寮にいるんだ？ 他の人は家に帰ってるだろ。」

「ああ、その事ですか？ まあ分かりやすく言うそうですね私の母親が再婚して玉の輿に乗りましてね。母親が春休みに旅行に行くっていうんで新婚旅行気分を味わせようっていう事で私は帰らずに寮にいるって感じですかね。」

「へ、へ。」

思っていたよりも重い話の様な気がしなくもないが彼女は明るく話しているので彼女には大した問題ではないようだ。

「そういえばどこらへんに住んでいるんですか？ 結構時間が遅いんですが……。」

「ああ、そこは大丈夫。俺はいつもは宿直室に寝泊まりしてるから。」

「え、聖應女学院に宿直室ってあるんですか？」

「ああ、あるのかどうかすら知らないか……。」

殆どの生徒はこんな感じなんだろうなとは思いつつも、少女との会話を紅茶を飲みつつ楽しんだのであった。

3月 優雨との出会い

3月の終わり、朝の9時。 俺は宿直室で目を覚ました。

俺の主観での基準だがこの学校の宿直室はかなり広い。 元々水道やトイレ、シャワールームが設置されていて宿直する教師に対する配慮がしっかりされている。 その部屋にさらに俺が冷蔵庫、テレビなどの家具を勝手に中に入れた…… 学校からは苦情は来てないから問題はないのだろう。

「さて、今日する事は……」

俺は独り言を呟きながらゆっくりソファから起きる。 宿直室には布団もベットもないのでソファに寝ていた。 最初の頃は体が痛くなったがもう慣れたものだ。 起きて自分の部屋を見渡すとテレビに冷蔵庫、そして部屋の真ん中にテーブルがありその上に携帯電話がポツンと置いてある簡素な部屋だ…… せいぜい睡眠くらいしかないので大して困らないし趣味に関する事は全て生徒相談室に置いてある。 ちなみに生徒相談室を初めて見たケイリの感想は「とても陸らしい部屋だ」というよくわからない事を言っていた。

「とりあえず草刈りは済んでるし教材も全部運び終えたし…… 書類の整理も終わった……」

はつきり言ってもうやる仕事がない…… これなら久々に趣味に時間を費やせるかもしれない。

「よし！」

趣味に1日時間を使う事が出来るのはなかなか嬉しい外も晴れるし外でやるのもいいな。 決めたら即実行！俺は準備をする為に宿直室を出て隣の部屋の生徒相談室へ向かった……この判断が俺の一年を大きく変えるとは今の俺は知る由もなかった。

生徒相談室は今じゃ私物の倉庫になっている。 別に盗むような人はいないだろうと鍵は貰っておらず鍵も掛けられていないので扉にを横に押すと簡単に開いた。

生徒相談室の中にはキャンバスが何枚も置いてある。 俺の数少ない趣味が絵を描く事だ。 元々絵を描くことがそこそ上手かった俺はずっとこれを趣味にしていた。 描いてる絵は大体が肖像画だ。 だが自分が見たことが無い人を描いた絵は肖像画なのだろうか？ 少し疑問に思ったが肖像画という表現が一番しっくりきたから肖像画という事にしておこう。

俺は、生徒相談室から何も描いていないキャンバスや野外用のイーゼル、アクリルガッシュの絵の具とパレット、筆やバケツといった必要な物を一通り準備しておく。 全て自腹購入であり、学校の物は一つも使っていない……使ったら怒られるのは分かっているし。

全部をいっぺんに運ぶのは無理なので真っ白なキャンバスとイーゼルを先に運ぶ。 ちなみにこの時に外に出るのに使う入り口は宿直室にある。 宿直室には学校の廊下につながっている横にスライドするタイプの扉と外につながっている前後に動くタイプの扉があり、いつもは宿直室から外に出ている。 ちなみに宿直室の扉の外は園芸部の倉庫に隠れていて見事な日陰になっている。

宿直室から出てキャンバスとイーゼルを持ちながら歩いているが……。

「……重」

流石にこの二つを一緒に持つて行くのはまずかったキャンバスとイーゼル二つともそこそこ大きく、重い……持ちづらくてかなり疲れる。

「やっぱり片方ずつの方がよかったか」

愚痴をこぼしながら歩くこと五分とりあえず中庭に着いた。いつもなら生徒で賑わっている中庭も今は誰も居ない。俺は、イーゼルの上にキャンバスを乗せそれ以外の道具を持つてくるためにまた生徒相談室にやや上機嫌で戻るのであった。

「……キャンバス？」

このとき俺は周りに誰もいないからといって油断していた……置いておいたキャンバスを誰かに見られるという可能性を……。

……数分後、俺は残りの荷物を一通りもって中庭に辿り着いた。中庭は先ほどと変わらず誰もいな……

「あれ？」

誰かいた。俺の真っ白なキャンバスをジッと眺めている少女が

一人いた。身長はやや小さめで髪は結構長めで右目に髪がかかっている……あれじゃあ右目が見えないんじゃないか？ 少女はずつとキャンバスを眺めていて俺が近づいても全く気がつかないようだ。

「よう、どうした？」

「……あ」

俺はとりあえず少女に話しかける事にした……そうしないと一行に動きそうにないからな。

「……」

「……」

目の前にいる少女は俺の方を向いたがその後すぐに目を伏せてしまった……かなり気まずい。

「……とりあえずどいてくれるか？ ここで絵を描く予定なんだが」「あ、あなたの？」

少女がキャンバスを指さしながら聞いてきたから大方「このキャンバスはあなたの物ですか？」っていう意味なんだろう。しかしなんでそんな事を聞くんだ？

「まあ、そうだ。それは俺のだ」

「絵……うまいの？」

「上手かどうかと聞かれたら上手な方かもな中学の時には賞も貰ったことあるし」

「そうなんだ……」

少女は感心したような声を上げているが少女とこれ以上会話を続

けていると準備に手が進まないのととりあえず準備に戻る。

「描くの……見てても、いい？」

「まあ、いいが……」

俺は、後ろから少女にじっと見られるのを感じやや気まづくなりながらパレットに絵の具を出し、濡らした筆に絵の具をつけキャンバスに描き始める。

「……下書き、描かないの？」

「ん？ ああ、描かないよ」

少女が不思議そうに聞いてくる。俺のキャンバスには下書きが一つも無いから当たり前の質問ではある。

「下書きは書かなくても問題無い」

「そうなの？」

「ああ、見えてるから」

「見えてる？」

俺には超能力？のような物がある。少し意識をすれば頭の中に見たことが無い人が見たことがあるかのように鮮明に浮かび上がり、それを絵に描こうとすればキャンバスの上には黒い線のような物がうつすらと俺には見える。俺がそれを下書き代わりにして絵を描けば頭に思い浮かんでいた人の絵が出来上がっている……という絵を描くことにしか使い道のない能力を俺は持っている。そして今もキャンバスには黒い線がしっかりとキャンバスに描かれている。

「まあ、下書きは書かない派なんだ」

「……そうなんだ」

少女は俺の答えに満足したようだがいまいちこの少女の感情が読みにくい。何を考えているのか俺にはサッパリ分からない……俺の絵を描く姿を見て何になるのだろうか。

昼になっても中々少女は帰らない。俺はずっと立ちながら描いていたが流石に後ろの少女が心配になってきた。

「……ちょっと待ってろ」

「……？」

少女は小首を傾げていたが小さくうなずく。俺はそれを確認すると小走りで宿直室に戻り折りたたみ式の椅子を持ってくる。この椅子は座りながら絵を描こうと買ったが結局立った方が描きやすかったので結局使わなくなった椅子だ。その後もずっと使っていないかったが今が定番だろうと持って中庭に戻る。

少女は中庭のキャンバスとジッと見て待っていた。……あの少女は実は人形か何かなのか？

「ほら、ここに座れ」

「あ……」

俺が少女の前に椅子を用意し座るように促す。少女は驚いたようにうでこつちジッと見る。

「……いいの？」

「ああ、立ちながら見るのは疲れるだろ」

「……じゃあ」

ゆっくりと少女が座る。こうして座っている姿を見ると中々絵になるな……まあ聖應女学院の生徒なら大体絵になるんだろうけど。

「そつえば、名前は？」

絵を再び描き始めて日が暮れてきた頃そろそろ片付けようと思ったので少女に話しかける。

「私？……優雨」

「優雨って……学生寮にいる？」「……知ってるの？」

「まあな、一応この学院の職員だし」

庭師だからな。

「俺の名前は白崎 陸。この学院で庭師をしている。よろしく、

優雨ちゃん」

「……よろしく、りく」

少女と自己紹介を済ませ俺は片付けを始める。優雨は手伝おうとしたが俺は先に寮に帰らせた……今回の春休みは思っている以上に人と関わったな。

「まあ、悪い事ではないんだろうな」

俺はいつもは生徒達とは極力関わらないようにしていたが……。

「まあ、そういう年があってもいいか」

ため息を突きつつ苦笑いをし、片付けをする。

この後の未来を知る神様は誰がいるのだろうか。

いるのなら頼ませてくれ。

全てを聞いてくれなくても結構だ。

だから一つだけ頼ませてくれ。

聖應女学院の少女達が悲しみに暮れるような事は起こらないでくれ。

優雨の事を思い出し優雨が歩いていった桜並木を見て俺は願う。

少女達が悲しみに暮れる事が運命ならば俺が代わりに絶望して苦しんで死んでも俺はその運命を回避してやる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0344ba/>

処女はお姉さまに恋してる 陰の庭師

2012年1月8日21時54分発行